



Title	『うつほ』の仲澄：作り物語の手法と指向
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	詞林. 2002, 32, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『うつほ』の仲澄

—作り物語の手法と指向—

加藤 昌嘉

I 物語史のなかの仲澄

「うつほ」の仲澄は、実の妹あて宮に恋慕し、報われぬ想いを抱いたまま煩悶のうちに死んでゆく人物であるが、「源氏物語」以後に作られた、いわゆる平安後期物語・中世王朝物語を読んでいると、この仲澄に出くわすことが、間々ある。

【イ】「春宮」「かく瘦せそこなはるばかり思ふらむことこそ心得たれ。仲澄の侍従がまねしたまへるなめりな。人もさぞ語りし。……」とまめやかにのたまはするを、「狭衣中将」「人の間ふまでになりにけるよ」と、いとど苦しけれど、

(『狭衣物語』卷一／新潮日本古典集成・五六頁)

【ロ】よろづに勝れ給つらん女の御あたりには、まことの御兄ならざらん男は、むつまじくもてなさせ給まじかりけれ。早うは、仲澄の侍従・宰相中将などの例どももなくは。

(『狭衣物語』卷一／日本古典文学大系・三一頁)

【ハ】中納言「=秋の中納言」のもとより参らせられたる

「うつほ」のゑなりけり。「木幡の姫君は」尼上にことはよませて見給。……】「うつほ」のゑを参らせ給へるも、「伊予守は」ことしもこそあれとおもひあはせられて、なかすみの侍従に思ひよそへ給にやど、心のうちにあんぜらるゝも、

(『石清水物語』／鎌倉時代物語集成・四三一四五頁)

【ニ】「関白 恋路は」女御「=養女 梅津の妹君」の御あつかひさへ物うくおぼしなられて、よろづをば、うちのをとゞ「=内大臣 端山」にのみ、いとゞゆづりきこそ給て、「……あかざりしゆかりは」=梅津の姉君への想いが叶わぬのに託けて、中すみのじゞうをもまねび給はずやは」との給みだせば、

(『恋路ゆかしき大将』卷五／鎌倉時代物語集成・三三二一頁)

【ホ】「若君」「それ」「=大将の妻 一品宮」もよくをはすれど、これ「=大将の妹 宣耀殿女御」はなをたぐひなくこそ。君に、給へるは、はらからな」との給。いみじうわらひ給つゝ、「右大将」「この人がたれよりもうつくし

う思ひきこゆる」と申時は、中すみのじうがまねやせんずらん、心のすゑこそうしろめたけれ。……」

II 回顧される仲澄——祐澄に於ける

(風に紅葉) 卷一／鎌倉時代物語集成・四六五頁

狹衣中将が、妹に等しい女性源氏宮に恋心を抱き続けるのは周知のところだが、【イ】【ロ】は、それを「うつほ」の仲澄に準えたくだり。【ハ】は、秋の中納言が、想いを寄せる腹違いの妹木幡の姫君に「うつほ」の絵を送る場面。しかも、その様子を「仲澄にことよせたか」と見る伊予守も、姫君と兄妹のよう育てられながら、これを恋慕している。【ニ】は、腹違いの妹に恋情を移すでないぞと、主人公が友人を揶揄したもの。【ホ】は、姉の「とき」存在である女御を誰よりも美しいといふなんて、と冗談交りに弟分を咎めた主人公の言。つまり、「うつほ」の「仲澄」は、近親相姦恋愛の徵として使われてある。

もちろん、【ハ】【ニ】【ホ】は、「狭衣」の影響下にあるとも曰されるし、一方、この他に、あて宮や仲忠の名を出す物語もありはするのだけれども、やはり、仲澄による妹恋慕は、「うつほ」の中でもとりわけ印象深いものとして或る時代に享受されたと考へてよからう。これらの物語は、仲澄の挿話を一つの範型として援用し、己の物語の人物相関図に重ね合せてしているわけである。

しかし翻つて見れば、こうした方法は、「うつほ」の後半部が、既に事としたものではなかつたか、と思われるのだ。

仲澄は、「あて宮」卷で悶死してしまつ人物であるが、以後も、「うつほ」後半部の卷々は、これを幾度となく招喚し、その存在を想起せしめている。

まず、「藏開・上」卷。「うつほ」は、物語の新たな始発に際し、かなりの紙数を割いて、故仲澄を回想・追悼する場面を設えている。

【A】「あて宮」「いま」、人にはきこえで、心ちにいみじくかなしとおもふ事もありや」⁽⁴⁾ 宰相「=祐澄」、「なに事か。もし、すけずみが気しき見給へし」とか「あて宮」「いで、いかでか見給はん。人のしるべきにあらずや」
【祐澄】「いで、されど、いとよくしりて侍。さはきこえんに、じうのうへに侍らずや。つねにさみ給へき。御とくにそこなひ給てし人ぞかし」女ぎみ、「つねに、ゆめにぞ見え給や」との給まゝに、なきたまふ。宰相のきみもなき給て、⁽⁵⁾ (藏開・上／⁽⁶⁾ 五六二頁・⁽⁷⁾ 一〇三頁) 今なお心の内に哀しく思う隠し事があるという妹あて宮に對し、兄源祐澄は、それは、「じうのうへ」すなわち仲澄のことではあるまいか、と指摘する。すると、あて宮は、

【B】「なにかは。しり給へれば。まだちゐさかりし時、さうのことなはし、ころなん、あやしくおもはぬやうな

る「仲澄の」けしきなんみえ^{〔5〕}。さて、としじろ、「仲澄は」なきうらみ給しかど、「私は」みしらぬやうにてやみにしを、「春宮のもとに」まいりてのちにも、かゝるふみをなんたまへりし」とて、とりいで、みせたてまつりて、

(藏開・上／^a五六二頁・^B一〇四頁)

と告白し、まだ幼い時分に兄仲澄が自分に懸想して來た様子から、春宮入内が決つてもなお恋文を寄越して來た次第までを語るのであつた。直接にそうした話を聞いた祐澄は、次のようにいふ。

【C】宰相「＝祐澄」、「仲澄は」心のいとみさほに、かしこかりしかば、身をいたづらになして、こともいださずなりにけるにこそ。すけずみらは、ことのふでう「＝不調」の、おぼえぬわざ／＼はしてまし。あるは、まだ宮【＝春宮】にまいり給はざりしそのとしのあきじろ、さやうならん人もがな、とはおもひ侍りし」との給へば、きみ「＝あて宮」、うちわらひ給て、「なき人の御やうにこそ。かのきみ「＝仲澄」は、物をおもひしけにやあらん、【夢では】みのくるしきことなんみえ給】

(藏開・上／^a五六三頁・^B一〇四頁)

仲澄は心が堅固で思慮ある人物だつたために、「身をいたづらに」なし、あて宮への想いを秘めたまま死んで行つた、と祐澄は説きつつ、自分であつたら良からぬ行動に出ただろうにと吐き、さらに、入内前のあて宮は理想の女性であつた

とさえいうのである。この不穏な発言については後述するとして、続く場面を見よう。

祐澄は、両親のもとへ行き、故仲澄があて宮の夢に現れるという話を報告する。

【D】「祐澄」「……」^aうの、ふじつば「＝あて宮」の御

ゆめに、思ひのつみに、みちならぬやうにみえ侍る」など申給。おとゞ「＝正頼」、「なにごとかは、さは思ひけん。……」「祐澄の」御いらへ、「をのこは、をんなにつけでのみこそは」「正頼」「この中には、たれかは」おほみや「＝大宮」、心をえ給て、「さは、さなりけり」とおもほして、いみじうなき給。……「すべて、よくもあれあしくもあれ、おとこ女にてぞあるべかりける。……」おとゞ「＝正頼」、「一宮なりけん。それぞ人におもはれぬべきさまし給へる」

(藏開・上／^a五六四頁・^B一〇六頁)

父源正頼・母大宮は、仲澄が誰に心を傾けていたのか忖度するのだが、正頼が「一宮」＝仲忠の妻女「一宮」なりけん」と推測するのに対し、大宮は「心をえ給て」、息子仲澄のあて宮恋慕を察し、「すべて、よくもあれあしくもあれ」、男女別々に育てるべきであったという。そして、この一連のくだりは、以下のように結ばれる。

【E】宰相のきみ「＝祐澄」、おかしとおもへど、かたわらいたければ、申給はず。このきみ「＝祐澄」、一のみやを

いかでとおぼしける。いまは、かの君をいかでかとおぼせど、きこえよるべくもあらねば、心ひとつにおぼす。さて、「この人」〔=仲澄〕のために、なを、すきやうなどせさせ給へ。そのすきやうのふみには、なを、「おもひのつみのがらかし給へ」と、右大弁するふさのあそんにおほせごとのたまひて、ぐはんもんかきて、せさせ給へ」ときこえて、たちたまひぬ。……かくて、侍従の君のために、四十九日に、ぬのな、むらづ、すきやうにせさせ給。

（藏開・上）△五六五頁・△二〇七頁

右のような次第で故仲澄の追善供養が執り行われるわけだが、いま問題にしたいのは二重傍線部である。諸註は「かの君」を直前の「一のみや」と同じと見、この文を、祐澄から女一宮への叶わぬ恋情を述べたもの、と解しているようである。確かに、祐澄の女一宮への懸想は「藏開・中」卷以降で語られる事柄ではあるのだが、そう解しては、ここが前後の文脈から浮いてしまう。また、女一宮を「君」と称するのも不審である。

この文は、「一のみやをいかでとおぼしける」という過去形から、「いまは、かの君を」へと転換するのであるから、「かの君」は、女一宮以外の別の女性、すなわち、あて宮を指していると考えるべきではないだろうか。つまり、ここは、「祐澄は、女一宮を何とかして自分のものにとお思いになつていだ。今は、あの人」あて宮を何とかしてとお思いになるが、

いい寄ることも出来ぬので、心の内でだけ想つていらつしやる」と解するのがよろしい。そして、こう捉えることで、【A】→【E】はより有機的に連繋する。

【C】で、祐澄が、「ことのふでうの、おぼえぬわざ～はしてまし」と、無体な振る舞いをしかねぬ気持を述べ、「まだ「あて宮が」、宮〔=春宮〕にまいり給はざりしそのとしのあきころ、さやうならん人「=あて宮のような女性」もがな、とおもひ侍りし」とさえいっているのは、軽口の態ではあるながら、祐澄の恋情を真率に表しているだろう。そして、それに対する、「なき人〔=仲澄〕の御やうにこそ」というあて宮の言は、機智的返答ながらも、図星を指したものとなろう。また、【D】で、兄弟姉妹であつても男女を隔てて育てるべきだつたと母がいい切り、仲澄の恋の相手は女一宮だったのだろうと父が誤解するのを聞き、【E】で、「おかしとおもへど、かたわらいたければ、申給はず」とあるのは、祐澄が今まさに、妹あて宮に叶わぬ想いを抱いているからだろう。さらにまた、【E】の、「おもひのつみのがらかし給へ」という願文は、故仲澄のために草されたものでありながら、同時に、祐澄が己の妹恋を祓うためにも機能するといえるだろう。

確かに、祐澄は、「みこふさひ〔=皇女好き〕」などといわれ、「藏開・中」卷から「国譲・下」卷にあつては、息子宮はたを使って女一宮に懸想文を送つたり、弟近澄とともに女一宮の掠奪をもくろんだり、源実忠の北の方にいい寄つたりな

としており、あて宮を恋う様子は窺えないのではないか。少なくともこの段階に於いては、妹恋に死んだ兄仲澄の後を継ぎ、あて宮に想いを寄せる新たな存在者として布置せられた、と思しい。

続く「藏開・中」卷に於いても、故仲澄は、祐澄と関連づけられて想起されている。次に挙げるのは、仲忠とその妻女

一宮との会話。

【F】大将「〔=仲忠〕、〔さて、問題なのは、宮はたの〕ち、〔=祐澄〕ぞ」宮「〔=女一宮〕、「それは、さも見えぬものを」大将、「あなかま。御をぢたちは、みなさる心」「近親同士の恋愛は禁忌だという倫理意識は」なきものなり。「人はいたづらにもなされぬめりき。たれにかあらん、さばかりものをおもふめりしは」みや「〔=女一宮〕、うちわらひて、「あやしきぬれぎぬなりや。ことすぢにこそ見ゆめりしか」

(藏開・中／α六一〇頁・β二六三頁)

仲忠は、宮はたから、その父祐澄が女一宮に宛てた懸想文を託されており、妻女一宮に祐澄との関係を聞いただそうとしている。女一宮は、叔父に当る祐澄にさような気はないで否定するのだが、仲忠は、女一宮の叔父たちはたとえ姪であつても恋情を持つだらう、という。このとき、祐澄から故仲澄へと連想が及んでいることに留意したい。仲澄は「いたづらにもなされぬ」=身を滅ぼしてしまつたが、それは、姪

である女一宮に想いを懸けてのことだつたのではないか。というのが傍線部の趣意であろう。思えば、先の【C】でも、故仲澄は「身をいたづらに」なした、と語られていた。「いたづら」は、「嵯峨の院」卷四例、「あて宮」卷三例、「藏開」卷二例というように、恋に溺溺する仲澄に取り付く、一つの鍵語である。

仲忠の猜疑に対し、女一宮は、それを「ことすぢ」だと反駁するのだが、この話題は、「藏開・下」卷、仲忠とその父藤原兼雅の会話でも再び俎上に載せられる。

【G】をと、「〔=兼雅〕、〔じじう、たれよりかは。もし宮〔=女一宮〕か」大将「〔=仲忠〕、「しらず。気しきみ給へむとものせしかど、〔女一宮は〕〔ことすぢ〕そ」となむ。「仲澄は」よるひるあそび、物おもひいりしかば、かくよのみじかゝるべかりければにや、とこそ見給へしか

(藏開・下／α六五七頁・β四五頁)

先に見た【D】直後では、源正頼が故仲澄の相手を「一宮なりけん」といつていたが、ここでも、兼雅は同様の推測をしている。

このように、「藏開」卷に於いては、女一宮が仲澄の恋い死にの原因であつたと人々の間で考えられているようなのだが、これは、【A】～【E】で考察した祐澄の問題と連動しているだろう。つまり、「藏開」卷は、祐澄→あて宮という恋慕を、徐々に、祐澄→女一宮へと移行するばかりでなく、仲澄

→あて宮という恋慕をも、人々の話題の上で、仲澄→女一宮へと変換しているわけだ。これは、「うつぼ」後半部が、物語の中心的存在を、あて宮から女一宮へ交替せしめようとしていることの現れであると思われるが、同時に、この移行によって、兄妹恋という禁忌が稀釈されることにも気づかされる。

III 回顧される仲澄——近澄に於ける

「うつぼ」後半部では、仲澄・祐澄の弟である源近澄が各所で活躍するが、この人物も、故仲澄の影を背負つてある。

【H】殿かむだちめ、みところ、大将「=仲忠」、中納言殿「=涼」と物がたりし給はどに、二侍従のみをとど「=近澄」、たいふなりしは、うちのくらのかみにて、くら人にぞものし給、こじじうには、かたちも心もまさりたる、たぐひなき色このみにぞありける、かはらけとりいで給へり。
(藏開・下／^α六三六頁・^β一七頁)

先に見た祐澄が、妹恋という点、女一宮恋慕という点で、仲澄の属性を引き継いでいたのとは少しく異なり、近澄は、兄仲澄より「かたちも心も」まさつた「たぐひなき色」のみとして登場してある。

【I】をと、「=兼雅」、「くら人の少将」「=近澄」の、をとまさり、「=弟優り」になりわかれぬべかめるかな。たゞ

いまのうへのは、これひとりなめりかし。こゝろもよげなり。「妻として」たれをかもたる」大将「=仲忠」、「=少将」「=近澄」はあるまじき心ばへ「=皇女を得ん」という想い」なれば、おやなどせいし給なれば、……親たちが「せちにせめ給なれど、「近澄は」思やまでなん心ちもしらぬべき物なめり、となんなげかる、」をと、「=兼雅」「じじう、たれよりかは。もし宮」「=女一宮」か……おとど、「=兼雅」、「れいなることなれば、げになげかれぬべくこそは。「近澄は」いづれをか」大将「=仲忠」、「二の宮」「=女一宮」こそは。……」
(藏開・下／^α六五七頁・^β四五頁)

右は、先の【G】と同じくだりであるが、近澄が、皇女を奪取しようという「あるまじき心ばへ」を持ち、親たちがこれを留めようとしていたという話題から、故仲澄が誰を恋慕していたのかという話題へと、やりとりが真直ぐに続いていることに注意したい。

この後、実際、近澄は、女一宮の掠奪をもくろみ、「かたはなれたるむま」「=奔馬」の^{ごと}」(國譲・上)とか「わかきもの、くるふを」(同)と評されるほど、ひたぶるな恋の徒として現出する。そして、そのときにも、次の^{ごとく}、故仲澄が引き合いに出されている。

【J】宮「=大宮」、「よの中に入るしかるべきものは、わがき人のすいたる、こにてもたるわざなりや。みぐるしう

いみじき物を見るこそ、いといのちながくなりなまほし
けれ。このちかすみといふ人の、わらはよりあやしくす
きてみえしかば、そへ物になりぬへして、かしこにも
ゆるしたうばでありしもの、……そのいふやうは、「近
澄」「心ひとつにえたえずは、いかにもいかにもと思へど
も、おやのさきにいのちなき人あらはなれば、かく申に、
そのごとくなし給へとはあらず、仏神にも、このこと
なおもはせ給そ、と申させむなどこそ」などいひつ。
……」……「大宮」「しらすや、その「=近澄」」いふこ
と、いとおそろしや。恋慕の相手は「このなからひにこ
そはあめれ」

(国譲・上/ 6九七頁・8九四頁)

あて宮や仁寿殿女御を前にして、母大宮は、息子近澄のあ
まりの好色ぶりを託ち戦く。そこで引かれる近澄の発言の中
に、「おやのさきにいのちなき人」とあり、これが、故仲澄を
指すと認められる。近澄の言は、ひたすら女二宮を想つてや
まないが故仲澄の例もあることだからその願いを叶えてくれ
とせがむつもりはなく仏神にも恋情を晴らして欲しいといつ
ているのだ、と訴えたもの。近澄は、己が故仲澄に比すべき
存在であることを自覚しているようである。

このように、「色」のみで「あるまじき心ばへ」を持ち
「おそろし」といわれるほど「あやしくすき」たる近澄の背後
には、決って、故仲澄の影が揺曳している。この援用法は、
禁忌の妹恋に煩悶するという属性を引くものでは、ない。顧

みれば、生前、仲澄は、「あやしきたはぶれ人」(藤原の君)と
称され、その恋は「ものくるひたる事」(嵯峨の院)などと
いわれていたのだった。【うつほ】後半部は、一途なまでに恋
に惑乱するという点に於いて、近澄と故仲澄を繋いでいるの
である。

さらに、祐澄と近澄とがともに女二宮奪取をもくろむくだ
りでも、故仲澄が婉曲に想起されている。

【K】おと・「=正頬」、「……我ぬしたちのみ心もしらず、
わかきをと、女、おやはらからとぐし給ふ、やすく思
ふべきにもあらざりけり」との給へば、宰相中将「=祐
澄」、うちわらひて、「きこしめしこりたることやあらん
さやうにすいたる人も、いまはべらぬ物を」と、つれ
なくいふ。したには、「いかでこのおりに「女二宮を」ぬ
すまん」とおもひたばかる。くら人の少将「=近澄」は、
物もいはで、「女二宮が」おりていり給はんほどに、い
りふしなん。そゑ「=それ故」にころされんやは。また、
さらば、さてしなん」と思ひおはす。

(国譲・下/ 8八八五頁・8九六頁)

たとえ親兄弟が周囲にいても、若い男を女と一緒にするの
は安心できぬと遠回しに釘を刺す父正頬の言葉を聞き、祐澄
は、そうした例を見て懲りたことでもあるのかといい、そん
な好き心を持つ人も今はもうおりませんのに、と笑いつつ、
心の内で皇女奪取を画策しているわけである。傍線部の「い

まははべらぬ」「さやうにすいたる人」は、故仲澄を指すと認められよう。加えて、その後に、物いわぬ近澄が、女二宮のもとに押し入つて抱き伏せてしまおうと、もくろんでいるのも留意される。「うつほ」後半部は、祐澄・近澄の不穏な挿話を綴るに際し、暴力に訴えかねぬほど女に懲溺するという、その徵として、故仲澄を援用しているわけだ。

IV 回顧される仲澄——実忠さねただに於ける

「国譜」卷にあつては、もう一人、その兄弟ではないにもかかわらず、仲澄に準えられる人物がいる。

【L】おとゞ、「=正頼」、「……からうして、とざまにまじらひてはぢながりしは、はがなくてまづかくれにき。されば、かたじけなくとも、いまはた「あなた=実忠は」おやもおはしまさぬを、たのもしげなくとも、との「=故季明」、御かはりとおぼせ。まさよりは、むかし侍りしもの、かくなり給へる、と思ひ給えん」などの給へば、

(国譜・上) α七四三頁 β一五六頁

右は、あて宮入内の報に絶望し小野に隠棲していた源実忠が、太政大臣であつた父季明の死をきっかけに都の世界へ戻り、叔父正頼と対面したくだり。あて宮の父正頼は、宫廷社会に復帰した甥実忠に対し、「己」を親と思つて欲しく、また、実忠を、「はぢながりし」「むかし侍りしもの」すなわち囁望

の息子であつた故仲澄のよう扱おう、と述べている。そして、この言葉を受けた実忠は、あて宮に、次のような文を送るのであつた。

【M】「実忠」「……おとゞ、「=正頼」もの給はせしやうに、むかしのじ・うの君の御かはりにおもほしなさば、の給しへもまかりかへらじ。あすのほどにまかりて、いま、さらば、時々はちかくを」

(国譜・中) α七六五頁 β一八一頁
己を「じ・うの君の御かはり」と思つて欲しいという実忠の言は、つまり、男女の色恋めいた関係ではなく、兄妹のごとき恋愛なき関係でありたいと告げるものである。もちろん、これは偽善的な物言いに過ぎないし、そもそも、その仲澄にしてからが妹あて宮を想つてやまなかつたのだから、この文言は、決して清廉な申し出とはなるまい。故仲澄の名は皮肉に作用するだろう。

そして、その下心を見透すかのように、実忠の妹である宮の君は、あて宮は「みそかをとこ」「=問男」を通わしていると罵るのであつた(国譜・上、国譜・中)。この宮の君=宣耀殿女御は、あて宮=藤壺女御と対立的な位置にいる人物であるから、これを敵視するのは当然なのだが、一面、春宮女御=宣耀殿女御は、あて宮と実忠との関係が孕む密通性をいい得てもいる。遡つて見れば、仲澄の死去も、実忠の隠棲も、ともに、「あて宮」卷で並立的に語られていたのだった。また、両者の恋

情は、ともに、我が身を「いたづら」になすという語を反復させながら綴られてもいた。仲澄・実忠は、「うつほ」前半部に於いてはバラレルな存在者であったと捉えられる。そこであつてみれば、「国譜」卷が、物語上に実忠を賦活せしめるに際し、そこに故仲澄を重ねさせ、下心ある擬似的兄妹関係を敷設しているのは、尤もなことであつたといえよう。

V 「うつほ」の指向性

以上が、故仲澄が想起された例、及び、婉曲に故仲澄を指示すると認められる例である。「藏開」「国譜」卷は、各々、上・中・下卷それに於いて、間歇的かつ恒常的に、仲澄を引き合いに出しつつ、祐澄・近澄・実忠にその属性を重ね合せ、凌辱・姦通を惹き起しかねない危険な男の物語を、新たに紡がんとしているのである。

この仲澄援用法は、最初に挙げた平安後期～中世王朝物語のそれとは少しく異なつていよう。辿り見たごとく、祐澄の恋慕の対象は、あて宮から女一宮へ、そして女二宮へと移行していた。また、近澄の恋慕の対象は女二宮であり、実忠の恋慕の対象はあて宮であった。【E】以後、近親相姦のモチーフは、微妙にずらされながら、潜在化してしまつてゐると思しい。「藏開」「国譜」卷にあつて、「仲澄」は、禁忌の妹恋の徴としてより以上に、破滅性・暴力性を孕んだ、貴女侵犯

の徴として招喚されてゐるのだ。

ただ、いずれにせよ、この造型法が「うつほ」後半部で完全に機能したかといわると、確かに、にわかには肯い難い。祐澄・近澄・実忠があて宮・女一宮・女二宮に迫らんとする一連の挿話は、物語に新たな展開をもたらす原動力にはなり得なかつたともいえる。だが、それを、構想の不燃焼と捉えるべきではなかろう。「うつほ」とは、そういう物語なのだ。

この物語では、挿話は、挿話としてある。

或いは、敢えて、こうした手法が物語に新局面をもたらさなかつた理由を説明するとすれば、それは、これらの男女の間には、密通も、情交さえもなかつたからだ、といえようか。仲澄をはじめ、祐澄・近澄・実忠、或いは彈正宮・五宮といった男君たちは、狂態を呈するほど女に惑溺し、狼藉に及びかねぬほど恋に憑かれてあるのだが、しかし驚くべきことに、「うつほ」という物語には、ついに、一つの密通も、一つ強姦も、一つの近親相姦も、描かれなかつた。祐澄の恋慕の対象が、妹あて宮から、仲忠の妻女一宮へ、そして未婚の女二宮に移行せしめられていたのは、この物語の潔癖さ（もしくは限界）を示してゐるようでもある。

蓋し、作り物語なるものが、構想の駆動因、長編化の起爆剤として、密通・強姦を方法化できるようになるには、なお、【源氏物語】の出現を俟たねばなるまい。

※引用する「うつほ」本文は、尊経閣文庫蔵前田家十三行本を底本とする以下のテキストに拠った。

▼室城秀之ほか「うつほ物語の総合研究」本文篇上・下

(勉誠出版・一九九九年)

β野口元大「校注古典叢書 うつほ物語 1～5」(明治書院・一九六九(一九九年))

ただし、句読点・濁点・鉤括弧の付し方、校訂の仕方は、私意によるところが多い。また、……は省略した箇所、「」内は私に補つた語句である。なお、右^α本・β本それぞれの頁数を()内に記した。

註

(1) 他系統の「狹衣」諸本も、この部分を有している。

(2) この部分を含めたくだりは、或る種の系統の諸本のみが有する独自本文。次の論稿を参照。

片岡利博「深川本狹衣物語の本文 卷一冒頭の脱文をめぐって」(『文林』第三四号・一〇〇〇年三月)

長谷川佳男「引用本文と異本を生む想像力」(『論叢狹衣物語』3「引用と想像力」)新典社・一〇〇二年)

池田和臣「源氏物語の引用表現における異文—引用本文の行方、引用表現の含意—」(『論叢源氏物語』4「本文と表現」)新典社・一〇〇二年)

(3) 「有明の別れ」「いはでしのぶ」等。

なお、後代作品の「うつほ」受容については、以下の論稿を参照。

中野幸一「うつほ物語の享受と伝来」(『うつほ物語の研究』武藏野書院・一九八一年)

辛島正雄「いはでしのぶ」の影響作—「恋路ゆかしき大将」と「風に紅葉」と—(『中世王朝物語史論』下)笠間書院・一〇〇一年)

(4) 「ありや」以下「あらずや」「見え給や」の「や」は、詠嘆の終助詞で、現代語の「～のよ」「～だわ」に当るもの。「うつほ」では、特にあて用が、これを多用する。

(5) 兄から妹への迫り寄り、および「琴」を描いたこのくだりは、「伊勢物語」四九段・「源氏物語」総角巻と相関連するものとして様々に論じられている。以下の論稿を参照。

片桐洋一「源氏物語における伊勢物語」(『解釈と鑑賞』一九六八年五月)

同「物語絵と物語本文—もう一つの場合—」(『源氏物語以前』笠間書院・一〇〇一年)

後藤康文「室の八島」の背景—「狹衣物語」試論—(『国語と国文学』一九九七年八月)

長谷川佳男「引用本文と異本を生む想像力」(『論叢狹衣物語』3「引用と想像力」)新典社・一〇〇二年)

池田和臣「源氏物語の引用表現における異文—引用本文の行方、引用表現の含意—」(『論叢源氏物語』4「本文と表現」)新典社・一〇〇二年)

(6) 寺田透「あて宮・実忠・仲純」(『平安時代の物語』)福武書店・一九九〇年)も、仲澄と実忠を並立的に捉えている。

(7) 「うつほ」後半部に於ける祐澄・近澄については、以下の論稿を参照。

野口元大「『蔵開』と『国譲』の世界」(『うつほ物語の研究』笠間書院・一九七六年)

中野幸一「うつほ物語第一部」(三谷栄一編「体系物語文学史」3書院・一九八一年)

物語文学の系譜 I 平安物語 有精堂・一九八三年)

拙稿「うつほ物語」二者一對の法」(『詞林』第二十九号・一〇〇一年)

四月)

(8) 物語の方法としての強姦については、以下の論稿を参照。

今井源衛「女の書く物語はレイプから始まる」(『王朝の物語と漢詩文』笠間書院・一九九〇年)

同「物語構成上の『手法一かい』見について」(『王朝文学の研究』角川書店・一九七〇年)

〔付記〕

なお、本稿で考察した諸例の他に、故仲澄を指すといわれているものが、二例ある。

【X】なかたゞ、なかすみの君を「誘つて」、「いざ給へ。なかたゞ、せちなる人〔＝母俊蔵女〕」によひまいらするを、御かけにかくして、いてりたまへ」なかたゞみ、「たれぞや」〔仲忠〕「いざかし」とていて、さてやむごとなくむつまじき人〔＝仲澄?〕にき丁もたせて、ち・おとゞ〔＝兼雅〕の御くつもたせて、「はやおりたまへ」と〔俊蔵女〕にいふ。

(内侍のかみ／四五九頁・八七三頁)

「内侍のかみ」卷は、「あて宮」卷で語られた源頼の出家が踏まえられていない等々矛盾点が多く、ために、成立や作者について様々に論じられて来た(野口元大「内侍督」の定位と「原＝吹上」、「うつほ物語」第一部の表現と構造―主として待遇表現を中心に―」「源氏物語以前」笠間書院・一〇〇一年、室城秀之「作られた過去―内

侍のかみ」卷における「吹上の宣旨」をめぐって―「うつほ物語の表現と論理」若草書房・一九九六年)。

右の「なかすみの君」については、諸註、仲澄死去が踏まえられない見「不審」としたまま措くか、「祐澄」に改訂するかしている(角川文庫「宇津保物語」中一四七頁脚注・三九三頁補注参照)。また、統く「なかたゞみ」も、会話の順序を考慮して、「仲澄」もしくは「祐澄」に改訂されている。やはり、ここは、当時の物語制作の次第を鑑み、「あて宮」卷に於ける仲澄死去を知らぬ人間が「内侍のかみ」卷を書いたと理解して、二箇所とも「仲澄」としておくより他あるまい。

いま一つは、「うつほ」の掉尾たる「樓の上・下」卷の例。

【Y】侍従のめのと、いふは、さがの院のみこの、兵部卿にておはせしが御むすめなり。〔ぐゑん侍従の、わらはにてしのびがたきなりし。〕「一宮〔＝女一宮?〕」の御はらから宮の、いとしおびて「侍従」のかたちいみじくうつくしげなればかよひ給ひしに、ちをたゞしばしまりけれど、めのと、すべきさまならずとて、名はつきたれど、宮のいとらうたきものにし給へりける也。 (樓の上・下／八九七三頁・八九六頁)

「兵部卿」でいらした人の娘「侍従のめのと」が紹介されるくだりで、傍線部「ごゑん侍従」が、故仲澄のことだと考えられている。しかし、これは、角川文庫はじめ校注古典叢書・新編日本古典文学全集等に於ける改訂本文である。前田本では、本行本文「ごく術侍従」とあり、その右に「ゑむイ」と傍記されていて、これを根拠に、「術は衛の讀字」でその下に「撥音無表記」があり、故源侍従と認める。仲澄の元服前の秘かな愛人」(校注古典叢書)と考えられ、本文が整定されているのである。

前田本以外の諸本を見ると、例えば、浜田本では「こ、術侍従」、岡本本では「兵衛侍従」、新宮城書本では「こく術侍従（右に「ひやうゑイ」と傍記）」となつてゐるが、いずれにしても、要領を得ない。そもそも、このくだりは、前後の文脈も不明瞭である。「侍従の乳母は、故源侍従が、童のころ忍びがたきであった者なり。」と切るのが妥当なのだろうが、「故源侍従が童のころ忍びがたきであった、一宮の兄弟の宮」と、以下に掛けて解することもできよう。「侍従の乳母は、故源侍従の女童で」と読む向きもある。また、「かよひ給ひしに」の下には、脱文が想定されもしょう。今、新見を呈示できるわけではないのだが、いすれにせよ、「こく術侍従」が故仲澄を指すとするところには、脱文が想定されもしょう。この想起法は、本稿で考察した諸例とは全く異なつた種類のものだといわざるを得ない。ここには、祐澄も近澄も実忠も現出せず、しかも、「故源侍従」云々という回想は、以後の物語展開や人物造型に如何なる効果も及ぼしていない。ここに、敢えて故仲澄が持ち出される必然性がない。更なる検証を要する箇所である。

（かとう・まさよし 国文学研究資料館助教授）